
今は勇者もダークサイド寄り

斥候部隊 隊員

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今は勇者もダークサイド寄り

【Zコード】

Z5520Y

【作者名】

斥候部隊 隊員

【あらすじ】

ある日突然、青年は勇者として召喚される。魔王討伐を王様に命令され、旅に出るが支度金を握つて即逃走。魔王討伐？知るか。報酬の出ない慈善事業をするほど、俺はお人好しじゃないんだぜえ。

正直者が馬鹿を見、卑怯者が甘い汁を吸う。そんな外道なコンセプトで描かれる、よくわからない物語。

晒し中

召喚？マジ勘弁

田が覚めると、異世界だった。

何番煎じだ、と自分でも突つ込みたくなつたが、そんな使い古されたネタをかまとなきや今の状況は理解できなかつた。

まず、俺は何故か石でできた円形状の台座にパジャマで寝転んでいる。台座を取り囲むように立つてゐる謎の男達は、そんな俺のパジャマに視線を注いでいた。なにこれこわい。

そして男達の中に紅一点、なんだか綺麗なお嬢さんが俺の股間部分、エクスカリバーがテントを作つてゐる場所を頬を赤く染めて注視してゐた。やめろ見るな。これは生理現象だ。男はみんな朝起きるところなるの。

俺は股間部分のテントを手で隠しながら、ぼんやりと今の状況を把握し理解した。

勇者召喚……

ファンタジーな本などでたまに見かける、あのシチュエーションだった。いや股間注視は別として。

取り敢えず、一生懸命テント張りを頑張つてゐる煩惱いっぽいエクスカリバーを宥めつつ、女人に声を掛ける。

「リリはどうですか」

すると、女人人はやつと俺の股間から田線を外し、ゆつくつと俺の目に合わせてぼそぼそと答えた。

「メ、メノウ王国の王城です。ま、まあ異世界から来たあなた様はご存じでないと思ひますけど……」

知らねえよ。ビービーだよモー。もつ異世界確定じゃねえか。

「異世界……ね。それにしても、来た、ですか。この状況を見れば、來た、ではなく無理やり連れてきた、の方がしつくりますね」

まず嫌味を放つて反応を見る。

すると女人人は、慌てたように囁つ。

「い、ご就寝のところ、こちらの都合で勝手に連れてきたことは謝ります。ですが、我が国はいま未曾有の危機に陥っているのです。すいません、それについては後程お伝えします」

未曾有の危機……魔王の侵攻か何かだらうな、と当たりをつけ る。

それで、俺に魔王を討伐して来いと王様か何かが命じるんだろ う。正直言つて、面倒くさい。

そういえば、もし俺が勇者としてここに呼び出されているなら、何が能力っぽいものは無いのだろうか。流石にいくら横暴な王様でも、何の力も持たない一般人を魔王討伐に向かわせはしないだろう。

まあ、それは後で確かめるとして、こつまでこの地下室のよう

な空間にいるんだらうつか。それを尋ねると女人人は慌てて、

「いいい今すぐ王様の下へ案内します」

後は……

「もし」「が異世界だとして、元の世界には戻れないのですか」

それを訊くと、また女人人は、すいません、と言つた。ビリや
ラムリラシ。

はあ、とか返事をしながら、俺はもう逃げる算段を立てていた。

魔王討伐？ 知るか。何で勝手に呼び出された挙げ句、そんな面
倒なことまでせにやならんのだ。

異世界に来たところのなら、自由に生きてやるぞ。

+

「こです。少々お待ち下さい」と言い、女人人は恐らく王様が
いるであろう部屋に入つていった。いや、女人人が入つていった扉
を見れば、そこが部屋といふ言葉に似つかわしくない程大きいこと
が分かつた。

一言で表すなら『間』である。恐らく、謁見の間とかそんな感
じだらう。

俺自身は、よくわからない格好をした男達に囲まれるようこし
て扉の前に立つてゐる。

5分程その状態で待つていると、謁見の間（仮）の扉が開いた。そして、中にいた2人の兵士らしき人に、謁見の間（仮）に招き入れられた。

やっと謎の男達から解放された。

謁見の間（仮）に入ると、まず毛の長いカーペットに驚く。なんぞこれ。寝転がりたい。

流石に王様の前でそんなことをするわけにもいかず、足を止めずに周りを小さく見回す。

なんか凄い。壁際の高さ1~5mくらいの甲冑は、動き出したりしないんだろうか。あの壺は高そうだな。思わず叩き割りたい衝動に駆られるわ。

やがて俺は頭を真っ直ぐに向け、玉座にいる王様を見る。でっぷりと肥えた豚みたいな王様のサイドに控えているのは、宰相か何かか。

俺は玉座から十数m程離れたところで、兵士から王様に跪くよう言われた。なんでやねん。取り敢えずおつかないから跪くけど、何か屈辱やわあ。

それで王様から告げられたのは、丸々予想通りの言葉だつた。要するに、民が困っているから魔王を倒して来いよ、と。

俺は表面上は絶対服従の構えをとつてゐるが、腹の中ではやはり逃げ出す算段を立てていた。

へへー、とか有り難き幸せ、とか言つてればば向こうも俺を信用するだろ。俺は向こうを信用しないけどね。ヒツヒツヒ。

取り敢えず逃げ出すのは魔王討伐の旅に出てから。恐らく貰えるであろう少くない旅費をパクつてしまはってくれてるぜ。ヤバイなんかワクワクしてきた。

適当に王様の言葉を聞き流し、眠気によりやつてへるあべびを噛み殺す。

なんだかやたらと話が長い。この王様は自分の声を聴けば、俺の士気が上がるとしても思い込んでいるんじゃないだろうか。何か一々上から目線だし。手前の声を聞いても、上るのは逃走に掛ける思いだけだ。残念だつたな。

しかも跪いたままの体勢で、王様の高説（笑）を延々と聴かれ続けるのだ。反感を抱くなと言う方がおかしい。

そのままの体勢で20分くらい王様のお話を聴き、疲れているだろ？、との王様の言葉でやっと解放された。

疲れではいるが、その原因の大半はお前のお話の所為だよ、王さま。

んで、謁見の間から出ると外で待ち構えていた謎の男達に、着いてきて下さい、と言われた。ヤダ。拒否したい。そう思うも、なんだかやつぱり抵抗できそつになかつたから素直に着いていく。

3分程歩いて、到着したのは普通の部屋だった。いや、やたらと豪華で普通ではないけどね。

謎の男達は、ここで寝泊まつして下を、と諱に残して去つて行つた。

取り敢えず中に入り、扉を閉める。辺りを見回して感嘆する。なんか色々と装飾過多でヤバイ。天蓋付きベッドなんて初めて見たよ俺は。

「、こ、ここで寝ていいんだろうか。シーツ汚しただけで城を追放されたりしないかな。それはそれでいいんだが。

おつかなびっくりベッドの感触を確かめるのみで座る。これはやばい。布団に入れば3秒で寝られる。

ベッドに座つたまま色々と考える。

だがそれは故郷への郷愁の念ではなく、恐らく自分が授かつたであろう能力についてだ。

俺が勇者だというのなら、光属性とかそんな感じの力なのではないかと思つ。

何かいかにも『勇者』って感じで強そうだ。

そういうえば王様が、明日から魔法の訓練を行つてもひつとのことを言つていた気がする。何だか少し楽しみだ。

いや、一度はファンタジーな世界で俺ツエーーーをやってみたいと思っていたんだ。

とか、そんな事を考えていると、眠気が再び俺を襲つ。この眠

気は耐えられない、そう判断した俺は素早く天蓋付きベッドに潜り込んだ。

ベッドの寝心地はやはり最高で、潜って10秒も経たない内に俺の意識は落ちて行つた。

+

翌朝、知らない人の声に目が覚める。ベッドから降りると、おはようございます、と声を掛けられた。

声のした方向を向くと、また謎の装いをした男がいた。だが、今回は集団ではなく1人の様だ。

取り敢えず、おはようございます、と返しておぐ。

すると男は頷いて、じゅうぶん歩み寄ってきた。よく見ると、男は手に何かを持っている。

男は、俺の前に来るとその何かを差し出した。どうやら、衣服のようであった。着る、ということか。

確かに、パジャマとか薄手だし、運動には向いてないからな。

男が部屋から出て行くと、服を床に広げた。

……これは、意図して初代辺りのドラ○H主人公ルックにしたのではあるまいか。いや、確かに動き易しだけどね。

一瞬躊躇つたが、やつぱりそれを着ることにした。パジャマよ

りはマシだろ？

一度着替え終わった頃、廊下から、朝食の準備が整つてあります、と聞こえてきた。

分かりました、と心えて部屋を出る。外にはやはり謎の男がいた。

「食堂はいじりにいぢやれこます。着いてきてトドセー」

そう促され、仕方なく頷く。お腹空いたしね。

謎の男に連れられてやつてきた食堂は、沢山の人で賑わっていた。食堂に入るところで、謎の男とは別れた。

どうしよう。お腹が空いて何かを腹に入れたい気分だが、どこで『飯は貰えるのだろうか。

そこで、近くにいた兵士に訊いてみた。

「すいません、『飯つてどこで貰えるんですかね』

俺の問い合わせして兵士は、

「ああ、そこだよ。てか、もしかしてあんた噂の勇者さん？」

指で指し示し、親切に場所を教えてくれた。

「ありがとうございます。昨日召喚されたのがそうだとこいつのなら、俺は確かに勇者ですね」

そう返すと、兵士は意外そうな顔になる。

「へえ……。あんた、相当肝が据わってんな。普通、召喚されたばかりの勇者ってのは自室に籠もつて3日くらい泣いてるもんだぜ」

「……ええ、普通ならそつなるでしちゃうね。向こうに未練があるなら、きっとその反応が妥当です。俺は、たまたま向こうに未練が無いからこいつして構えていられるんです」続けて俺は言つ。「それと、やっぱり俺と同じように異世界から召喚されてしまった人がいるんですか？」

そう質問を投げ掛けると、兵士は困ったよつに頭を搔き言つた。

「すまねえ……その辺は守秘義務が課せられて言えねえんだ。まあ、守秘義務を課せられていることを喋るのも本當はダメなんだがな」

そういうて兵士は快活に笑う。

「いえ、何かり向までもりがとうござります」

「いいひてことよ。困つた時はこつでも頼つてくれよな」

何だこの人いい人過ぎる。

「本当にありがとうございます。あの、お名前を伺つても？」

「俺はベム。ベム・ケーリ。あなたは？」

「俺はマサト・ヤマダ……になるのかな、」

魔法訓練とは

取り敢えず食堂で朝食を摂った俺は、食堂から出た地点でひつりうろと彷徨つていた。

飯は食つたけど、これから何をすればいいんだろ？。

そこで拳動不審にしていると、またしても謎の男が現れて、言った。

「朝食は食べましたね？」では行きましょう。次は魔法訓練です」

「魔法、ですか？」

「魔法を」「存じですか？」

「知つてているといふか、俺のいた世界では魔法は空想上のものでしたから、こまいちピソと来なくて……」

そう言つと謎の男は、そうですか、取り敢えず着いてくれば解ります、と言つて俺に背中を向けてどこかに向かつ。俺は慌てて謎の男を追つた。

俺が謎の男に連れられて来た場所は、外にある訓練場のようなところだった。いや、恐らく訓練場だろう。兵士が剣を交えているのを見れば即座に分かる。

俺も、召喚される前は剣道をやっていた。そこそこ強い方で、県大会で優勝したことも何回かある。

それでも、俺は目の前で闘つ兵士に勝てるとは思えなかつた。剣道の戦い方は、実戦向きではない。剣道を習い始めた頃、そう思った。

恐らく、相手が実戦向きの剣を習つていて、それが例え自分より格下でも、俺は確実に負けると言い切れる。

剣道とは、そういう武術だ。

「勇者殿？」

と、いけない。いつの間にか足を止めてしまつていたようだ。謎の男がこちらを怪訝そうな顔で見ている。

「いえ、すいません」

謝罪して、また後を追う。どうやら、魔法訓練とやらはここで行わないらしい。

それからまた少し歩いて、着いたのは屋内だった。体育館を彷彿とせるような場所である。

広さは一般的な高校の体育館の5倍はある。

そこで、ロープのような物を着た人達が火の玉やら氷の塊やら

を飛ばし合っていた。

縦長の形状の体育館、その壁に沿つて並んだロープの人達が向かい合って『魔法』を撃つてゐる。

「あなたも、今日からここに混じつて魔法の訓練をしてもらいます」隣に立つていた謎の男が言つて、魔法を撃ち合つてゐる人達に指示を出していたロープ（恐らく隊長かなにか）に向かつて歩き出した。

そのまま謎の男は隊長の田の前まで行つて、隊長と何事かを交わす。

隊長は、謎の男と話しあえるところに向かつて手招きました。来い、といふことか。

隊長とかなんか強そつだから逆らわない。俺はよほどの事が無い限り、大きな力には逆らわないのだ。

隊長の前までくると、何かじつと見つめられた。キモい。オッサンに見つめられても抱く感想はそれくらいだ。

「魔力は多いみたいだな」

隊長は俺に言つ。

謎の男?また知らん内にどこかに行つてしまつたよ。

「そ、そうですか……」

愛想笑いを浮かべて応える。つーか魔力で、よくゲームで見かけるMPとかそんな感じの物か？

面倒だから訊かないけどね。

「君はこれから、私と訓練をしてもらひ。魔法を上手く使えるようになる訓練だ」

「はあ……」

そんなことは想定済みである。どうでもいいから早く俺一人でEEEEEめひせりよ。

「まず、魔法とは　」

勝手に魔法の講義を始めたオッサン。もうヤダ。

30分後、やっと隊長の魔法講義が終わる。それでは実践だと隊長が言い、俺は頷く。

「こりで

『まさかこれ程とは……流石は勇者様だ』

的な展開になるのだろう。非常に楽しみである。

隊長は俺から十数m程距離をとつ、魔法を撃つてこい、と言つ

た。

どうやるんだ、と訊くと、手から『血液』を放出するイメージで、と言われた。出来るかボケ。

取り敢えず掌を隊長に向け、目を瞑り掌に意識を集中する。格好は、周りで魔法を撃ち合っている奴らの模倣だ。

おおおお、なんか、掌から出てる氣がする。薄らと口を開けると

黒いナードが、にゅっと俺の掌から出てきていた。

魔法訓練とは（後書き）

お気に入り登録してくれた方、本当にありがとうございます。執筆の際、かなり励みになつております。

感想、誤字脱字指摘など、戴けると嬉しいです。

暴走？

キモい。俺が、掌からでる『黒いナード』に抱いた感想はこれだった。

俺の掌から依然として出てきていた黒いナードは細長い形状をとつており、長さが100cm程になると、掌を離れ、存外硬質な音をたてて魔法訓練場の床に落下した。

その形と、落下時の金属質な音から鉄パイプを連想する。

隊長の方を見ると、なにやら驚いた表情でこちらを見ていた。

やがて隊長は驚愕から立ち直ると、こちらに歩み寄ってきた。

どうしたんですか、と訊くと、流石は勇者様だ、と言われた。これ何のネタっすか。

隊長の話によると、いま俺が出した黒い鉄パイプモードキは、極端に使い手が少ない闇魔法なのだという。闇魔法は非常に強力で、光魔法なんかは及びもつかないとか。曰く、最強。

闇魔法が最強たる所以は、魔法を打ち消す力があるのと、魔力を固形化して变幻自在に操れるからと。

早くも俺無双フラグか？　万単位の軍勢に俺一人で突っ込んでいくビジョンが脳裏に浮かび、ぶるりと身震いする。

「冗談じゃない。俺の鶏心^{チキンハート}がそんな刺激に耐えられるワケがない。

俺がそんなことを考えていると、隊長は

「その棒を変形させてみてくれ」

と、鉄パイプモドキを指差して言った。どうやらなんだと訊くと、頭の中でイメージしろ、と言われた。

変形、変形といつても、何にすればいいんだろうか。ただ形を変えるだけだから何でもいいのか。

よし決めた。『刀』にしよう。

頭の中で、いつかじいちゃんが見せてくれた模擬刀をイメージする。あれは綺麗だった。刃引きは切つ先だけされておらず、かなり鋭かった。

イメージを固めると、黒い鉄パイプモドキを頭の中で刀の形状にする。すると

床に落ちていた鉄パイプモドキは、うねうねと蠢き形を変える。最初はなんだかよくわからない形状だったが、徐々にそれは、確実に刀へと形をえていた。

完全に鉄パイプモドキの動きが止まったとき、そこにあつたのは、あの模擬刀そのままだった。色は黒いままだけどね。

「これは……凄いな」

隊長はなにせり感嘆の声を漏らしてこる。いや、俺もびっくりしたよ。

「……これ、持つてみていいですか」

隊長に訊いてみた。だって、刀は男の浪漫だもの。

隊長は頷き了承の意を示した。

震える手で、黒い刀を拾う。

そのとき、急に体から何かが抜けていく感覚が俺を襲つた。俺の感覚と反比例するように、刀の雰囲気は力強さを増した。

「なん……だ……？」

吸われている。明らかに剣に何かを持つていかれている。魔力とやら、だろうか。

「くっ……」

刀から手が離せない。指を動かしたいだけなのに、全身の筋肉が動かない。

刀は、どんどん存在感を増していく、なにか刀身に黒い霧のようなものまでまとわりつき始めた。

このままじゃヤバい。死ぬかもしれない。

ふつ、と意識が遠くなる。

死んでたまるか、と俺は思う。

いきなり剣と魔法のファンタジーな世界に召喚されて、今のところは自由も利かない。やつとファンタジーの片鱗を垣間見たと思ったら、次の瞬間には死にかけている。

死んでたまるか。その思いだけで意識を必死につなぎ止めた。隊長は、どうする事もできない、と凄く申し訳なぞうな顔でこちらを見ていた。

周りで魔法訓練をしていた連中も、手を止めて俺を見ている。

死にたくない。死にたくないけど、どうしようもない。状況を、打開できない。

そう考える間にも、どんどん俺は力を刀に吸われていく。

ぼんやりとしか働かない頭で、ある策を思い付いた。今の状況を見れば不可能に近いが、やらないよりはマシだ。

刀を持つていなの方の手から、にゅる、となけなしの魔力で作った闇の触手を出す。もう、残っている魔力は殆どない。

その触手を手から離れないように伸ばしていく、刀に近付ける。刀の纏う霧に触手が触れた瞬間、触手ごと魔力を吸い取ろうとするような力が襲う。だが、吸い取れない。吸い取れない。

逆に触手をホースのようにして、刀が纏う霧を吸い取る。はは

つ、出来たぜ。

頼りない魔力で作られた触手は、霧を吸い取つたことで強度を増した。そのまま刀に触手を触れさせる。

お！？ ヤバい、思つた以上に刀の力が強い。このま
まじや、さつきの繰り返しだ。

刀に消されるかに見えた触手は、意外と拮抗している。もう俺
は、手から魔力を吸収されていなかつた。

「おおおおおおおー！」

俺は氣合いの声を上げた。

そのとき、絶妙なパワー・バランスを保つていた触手と刀は、均
衡を崩し僅かに触手が刀の魔力を吸収した。

触手は奪い取つた魔力分だけ強さを増し、刀より優勢になる。

それから触手が、刀の魔力を吸い尽くすのに、あまり時間は掛
からなかつた。こうして俺は、九死に一生を得た。

魔力制御（前書き）

ちょっと勇者育成編に作者が飽きてしましたので、さくっと進めたいと思います。

周りから、歓声が挙がる。

ぬうう、いつ言つちゃ悪いが、たつたいま黒い模擬刀を必死の思いで消した俺はかなり疲れていて、正直この歓声は迷惑以外の何物でもない。

「大丈夫か！？」

流石に歓声は挙げなかつた隊長が、声を掛けてきた。

「……ええ。ですが、なんだか疲れました。何なんですか、あれは俺が訊ねると、隊長は申し訳なさそうな顔になつて答えた。

「闇魔法の暴走だ。……すまん、まだ魔力の制御も出来ない内にやらせる事ではなかつた……。完全に私の失態だ」

そうだ、お前の所為だ。危うく死にかけたぞ。どう責任とつてくれるんだ。

「あなたの所為ではありません。僕の過ぎた好奇心から起きた事故ですから。そんなに気負わないでください」

真っ黒な腹の中を隠し、笑顔が素敵な好青年を演じる。愛想笑いなら誰にも負けない自信がある。

隊長は、田を潤ませて言った。

「 ゆ、勇者様あ」

キモい。マジで誰得。オッサンのこんな顔見たくなかつた。

オッサンフラグが立つたかもしけん。脱出する前に圧し折つておかなければ。

「 その魔力制御とやらができるれば、今のは暴走しないんですか?」

「 あ、ああ」

よしやう魔力制御。今すぐやう。

「 魔力制御を教えて下さー」

「 しかし、君は今死にかけたんだぞ。危険では 」

「 お願ひします、教えて下さい。魔王に蹂躪されるこの国の国民の事を思うと、何かしなくてはこられないんです」

真っ赤な嘘である。蹂躪されているのかどうかも知らん。

しかし隊長は、俺の心意氣（爆笑）にいたく感激した様子で、結局教えてくれる事になつた。

魔力制御訓練開始3時間後、俺は完全に魔力を制御出来る様になっていた。周りから、流石は勇者様だ、とか聞こえた気がしたがきっと幻聴だ。

そして、再び挑戦するのは例の模擬刀。今ならいける気がする。掌を前方に向け、集中する。やがて、またしても棒状の闇魔法が、にゅ、と飛び出す。

それを100cm程の所で意図的に切り、さつきの鉄パイプモドキと全く同じ形状にした。

鉄パイプモドキが床に落ちたのを確認すると、また模擬刀を頭に思い浮かべる。

鉄パイプモドキはまたしても奇怪な動きをして、黒い刀の形状に落ち着いた。

「今度こそ……」

ゆづくりと刀を床から拾う。

ぐつ、と魔力を持つていかれない事になるが、耐える。

魔力を全く持つていかれない事を確認した。

「やりました……！」

俺は感極まった様子で呟く。いや、内心は見た目程感激してな

い。

おお、とまた周囲からどよめきが起る。隊長に至つては涙を流しながら「立派になられた」とか言っていた。隊長ウザい、ウザ過ぎる。

それから夜になるまでずっと刀で遊んでいた。そこで得た教訓は、魔力を使い過ぎると疲れる、ということだった。

ということで、俺はベッドの中に入ると泥の様に眠った。

+

次の朝、またしても謎の男に起こされた俺は着替えて食堂へ向かつた。

食堂に着いて、飯を貰いにいく。なんか少し、プロイラーの様な気分になつたが気にしない。

飯を貰つてなるべく人のいない席に着いた。そこでそれが「えられた仕事であるように、そもそも飯を食べていると、隣の席に見覚えのある青年が座つた。

「おはようございます。ベムさん」

見知った顔で、恩人なので声を掛けた。するとベムさんは、にかつ、と笑つて俺に応えた。

「よっ、マサト。昨日ぶつ

そう言ってベムさんは自分の料理に手をつける。グラトコロルスとかいう大層な名前の料理だったが、ただの卵と挽肉のそぼろ丼である。

ベムさんと色々な事を話しながらグラトコロルスを食べた。ベムさんは聞き上手で、俺は故郷の日本の事を少し話した。だが、日本の中の科学技術などの事には触れなかつた。下手な事を言つて、科学技術が軍事転用されても困るしね。可能性は低いだろうけど、ここは異世界なのだ。慎重にならなければ。

飯を食い終わると、自らの足で魔法訓練場に向かつた。今日は何をするんだろ？

魔法訓練場に着くと、隊長に何か物凄く歓迎された。来なればよかつた、と心底思つた。

今日はじゅうやら、細かな闇魔法の制御と、闇以外の魔法の訓練をするようだつた。

隊長に手取り足取り魔法を教えてもらつた。おかげで、闇魔法での『殺し』のテクニックや、炎と雷の魔法が少し使える様になつた。なんか今なら国を相手に喧嘩出来そうな気がする。面倒だからやらないが。

そして部屋に戻り泥の様に眠……れなかつた。部屋の扉がノッ

クされたのだ。

非常に面倒だが、仕方ない。扉を開けて、ノックの主を見る。

またしても、謎の男だった。

男は、この世界の宗教観やら軽い地理の説明、この世界の通貨、常識などを俺の頭に詰め込んで去つて行つた。何だったんだ一体……

次の日、俺は王様に呼び出された。

魔力制御（後書き）

モンハンの一次創作が書きたい。

冷酷無比な鬼畜ガンナーに憧れます。

真っ黒な背景（前書き）

いつもと遅くなりました。更新速度の向上をキツヤつです。

真っ黒な誓い

現在、俺がいるのは謁見の間だ。今俺は、存在することに幾分の価値も見出だせない様な豚（もとい王様）に跪いている。

豚の背後には、精悍な顔立ちの青年と、ロープ姿の銀髪の美少女、修道服を着た蒼い髪の美女が控えている。

と「うとうつたらしい。

俺の魔王討伐の旅、その出発式。

豚の後ろにいる3人は旅のお供か。余計ことじやがつて。逃げにくくなるだらうが、このぶたやう。

そんな俺の心の中の悪態は届くハズもなく、豚はたらたりと悶つたらしい口上を垂れている。やつてらんね。

「王様」

面倒になつた俺は、王様の話を途中で遮つた。これくらい、今俺の実力を鑑みれば許される事だ。

「どうした、勇者殿」

王様は特に気分を害した様子もなく聞き返してきた。

「お話の途中、大変申し訳ないのですが、私は今すぐに旅に出たいです。迫害されている民を想うと、いてもたってもいられないのです」「

意外に、早く式をやめる、と言つてゐる。

「おお、勇者殿、そこまで我が國の民の事を……。余は感動した。では直ぐにでも旅に出てもらいたいが、暫し待たれい。いくら勇者殿とて、一人で魔王に挑むのは無謀だ。そこで、我が国からも優れた使い手を魔王討伐に参加させようと思つ。……おい、フラット、シス、カーディ、勇者殿に自己紹介をしろ」

豚が言つと、豚の後ろに控えていた3人は俺の前に歩み出てきた。そして、精悍な顔立ちの青年が口を開く。

「フラット・ジョゼンだ。一緒に魔王討伐へ行く事になった。歳は17。よろしく」

「マサト・ヤマダ。歳は17。」

そう言つて握手する。

フラットは、かなりやる気に満ちあふれている。俺の苦手なタイプだ。

次に、修道服を着た女性が口を開いた。

「カーディ・アコライトよ。僧侶をしているわ。歳は22。よろしく

く

「へじゅみやくわく」

そう言って、握手。

次は、銀髪の美少女である。

「……シス・ライオネ」

実に無表情に、実に淡白に、実に氣だるげにシスといつ少女は自分の名だけを告げた。

いや、やる気のあつすぎる奴は苦手だが、ここには酷いだろう。

協調性とか絶対に皆無だ。明らかにハラハラ障だよ。

まあ、魔王とやつ合つもつがない俺としては嬉しい限りだが。

「よひしく」

笑顔で言つが手は差し出さない。どうせ握り返してこないで俺が恥かくんだから。

「準備は出来たか、勇者殿」

「ええ」

豚の問いかけに応える。

「城から出た所に馬車がある。フラットが馬車を扱えるから、それ

に乗つて旅をすればよからひ

「おつがとういぱこます」

ちよつと待て。

支度金は？

……嘘だろ、無一文で城の外に放り出す気か？

と、思つたら、僧侶のオネエサンが金を受け取つていた。まあいいや。取り敢えず預けといつ。

謁見の間から出て、城の外に向かつ。城の廊下を、恐らく短い付き合いになるだらうお供達と歩きながら、俺は昨日謎の男に教えてもらつたこの世界の金の単位を思い出していた。

寝る間際だつたのでつり覚えだが、たしか

『基本的にこの世界には硬貨しかありません。銅や銀だと複製される可能性がある、金だと作製にコストがかかるので、硬貨には特殊な金属が使用されています。なので、硬貨の製法を知っている者はほとんどいません。単位は

赤	1円（日本円換算）
橙	50円
黄	100円
綠	500円
黑	750円
銀	1500円
金	5000円
白	20000円』

……だつたかな。

硬貨には色が着いていて、色によって単位が違うそうな。小切手なんかもあるらしい。

考え方をしていたら、城の外に出ていた。

俺は金持ちになることを、異世界の抜けるような青空に誓い、1人ほくそ笑んで馬車の幌をくぐるのだった。

真っ黒な誓い（後書き）

なんかこのまま更新速度が下がっていきそうで怖いです。精進せねば。

推測（前書き）

いつも早く投稿でお願いました。

馬車に揺られて2時間、ようやく俺+お供は、メノウ王国を出た。それなりに大きい道を通つたとき、勇者の出発だというのに城下町の人々の反応は醒めたものだった。まるで見慣れた光景を見つめるような、そんな反応。馬車の中のお供（シスを除く）の態度は、申し訳なさそうな感じである。

この様子から推測するに、やはり勇者というのは何度も召喚されていっているのだろつ。何度も召喚されているといふことは、魔王は倒される度に短い周期でリポップ（再発）するか、もしくは魔王に挑んだ勇者は全て魔王に倒された、従属させられたかだろつ。

そして、俺という使い捨て殺戮マシン（勇者）が利用されることにフリックとカーディとやらは罪悪感を感じている、と。

……どうでもいいな。歴代の勇者が殺されていようともこと、俺はこの世界で俺TENSEEEEEEEEするだけだ。

「魔物だッ！！」

その時、一人御者台にいるフラットの怒声が響いた。

幌から顔だけを出し、前方を確認する。成る程、馬車の100mぐらい先に虎のような生物が3匹いた。だが虎ではない。虎の尻尾は2本もないし、牙もあんなに長くない。

とこ「い」とで、

「フラット、お願ひします」

前衛に丸投げした。

何も考えなしに行かせたワケではない。恐らくあの性格からフラットは好戦的だろう。だから嬉々として向かうハズ。

案の定、フラットは剣を片手に飛び出して行つた。勇者のお供といつからには、あんなモブっぽい奴に負けることはないだろ。

幌の中に首を戻すと、僧侶のカーディが苦笑いしていた。

「勇者さん……あんた意外と酷いわね」

それには答えず、ただにっこりと笑う。喋るのが面倒臭い。

「どんな魔物だったの？」

またカーディが訊いてきた。ちょっと煩い。

「虎みたいなやつですよ。尻尾が2本あるやつ。それが3匹いました」

カーディの顔が固まる。

「ちょ、ちょっと、それってツインテールタイガーじゃない！？ フラット……」

いきなりカー＝ディは叫ぶと、馬車を飛び出していく。危ない魔物らしい。あのカー＝ディの様子では、フラットはもう生きて無いかもしけん。ちょうどいい。このままカー＝ディも死んでくれんかな。

やがて外から悲鳴が聞こえてきた。フラット、カー＝ディ、無念。

馬がやられちゃ厄介なので、虎を倒さなければ。

シスをちらりと見やると、興味なさげにしていた。ドライ過ぎる。

また幌から顔を出し、虎を見る。虎の後ろに見える赤いのは俺の所為じゃない。あいつらが勝手に飛び出していったんだ。

……虎の影に視線を集中し、そこから闇魔法を使つ。影と夜は全て俺の支配域である。

虎は、影から飛び出した闇の杭に貫かれ、3体とも絶命した。

止まっている馬車から降り、ツインテールタイガーの「骸の下へ向かう。魔物の素材は売れるらしい。

肉とかではなく、毛とか牙とか。

牙だけ取るのは面倒なので、闇魔法で首ごと刈り取る。首3つをリュックサックに入れて、カー＝ディの遺体の腰（恐らく）に括り付けてある袋を拾つ。ひつひつひ、金だ、お金ちゃんだ、うひひ。

ほくほく顔で馬車に戻る。豊作じゃ、豊作。

幌をくぐり、馬車の中に入った。シスは、やはり無表情で興味なさげだった。

……こいつは殺さなくても大丈夫か。

俺は、メノウ王国に密告されることを恐れている。カーディやフラットのような魔王討伐に乗り気な奴は、俺が逃げ出したら間違いなくメノウ王国に密告するだろう。それは困る。行く先々の国で俺がお尋ね者なんかになってしまふ可能性が、なきにしも非ず。

フラットとカーディは、ここで死ななくともいつか機会をみて殺すつもりだった。俺の自由な異世界ライフを邪魔する奴は、如何なる手段を用いても突破する。

血に染まつたリュックサックをその辺に放り、どつかりと腰を降ろす。

あ、御者いないじゃん。

重大な事実に気が付いた。

推測（後書き）

フラットとカーディには消えていただきました。

移動手段（前書き）

ちょっと遅れましたね（汗）

短いですが、楽しんで頂けたら幸いです。

移動手段

「御者がない……だと……」

俺は、動かない馬車の中で呟いた。現在、馬車に搭乗しているのは俺とシスの2人だ。

「……」

シスは、やはり無表情に無言を貫いている。なんだか、身動きもしない姿を見ると、人形かと思ってしまう。時折目瞬きしているから、恐らく人間だらう。

「シスさんは、御者つて出来ます？」

返答がこないのを承知で尋ねる。

「……」

やはり返答はなし。

どうじよつ。馬車が動かないからって、歩くのも面倒だ。

俺が黙考していると、

「……ねえ」

シスから声を掛けられた。しかし不意討ち気味だったので、怯

んで返答が遅れる。

「……どうかしました？」

「……あなたは、本当に勇者？」

……どうこつ意味だろ？ 質問の意図を図りかねる。

「……あなたからは、魔王と相対する意志を感じられない」

そういう事か。つまり俺が国に従順な勇者を装っている」と云ふことを気付いた、と。

シスも、フラットとカーディが死んだ事には気付いたろう。そして、フラットとカーディを殺したツインテールタイガーを一瞬で仕留め、首を刈り取つて、カーディが持つているはずの金が入った袋を持ってほくほくしてればイヤでも気付く。

「ああ、俺は魔王を倒すつもりなんて毛頭ないよ」

言葉遣いも、野暮つた敬語は止めた。

「なあ、俺の今の言葉を聞いて、お前はどう行動する？ 王様に密告するか？ それとも、勇者が魔王にやられた事にして城に戻るか？ 前者なら俺はお前を生かしておけないがな」

「……私は、あの国に戻るつもりはない」

シスはきつぱりと言った。

俺の脅しに屈したワケではないだろ？。なにかあの国によくな
い思い出があるのか。

「なあ」

俺はシスに声を掛けた。訊きたいことがあったのだ。

「先代の勇者は、どうした」

「……魔王になつた」

はーん。成る程。

「民衆には？」

「……勇者と魔王が相討ち、と伝えられた」

そりだらうつな。

民衆の耳に心地よこよつこ、そんな話になつたんだろう。

勇者が魔王になつただなんて民衆に伝わつたら、民衆の勇者召
喚に対する扱は、今のものより冷たくなるだろ？。最悪、勇者召喚
をという制度も無くなるかもしけない。そうすると、魔王に対抗出
来る者がいなくなり国が滅びる、と。

「まあ、いい。取り敢えず田下の問題は移動手段だ。馬車を動かせ
ないからには、徒歩しかない訳だが」

夜當テントなどを背負つて歩くのは、かなり辛いだろう。それに、虎の頭が3つもあるのだ。ぐそ、フリット何故死んだし。

「……」

シスが急に立ち上がった。そして、シスの近くにあつた、袋に包んであるテントを掴むとおもむろに何もない空間に『放り込んだ』。

……ファンタジーばねえ。

消えたのだ、テントが。何もない空間に。

「……」

シスは無言で虎の頭の入つたリュックサックを指差した。リュックサックを渡すと、それもシスの手によつて虚空に消えた。

……もう一度言つ。ファンタジーばねえ。

ともあれ、これで選択肢に徒步が増えた。まあこれしかないんだが。

取り敢えずの目標は、街に着くこと。そう考え、俺とシスは馬車を降りて砂利がむき出しの街道を踏みしめるのだった。

移動手段（後書き）

感想など頂けると作者のモチベーションが上がり、あなたに（恐らく）幸運が訪れます。

奴隸（前書き）

奴隸タグ付けておいた方がいいですよね……

大分日が傾いてきた。

俺とシスは、馬車を降りてからずっと歩き続けていた。
時折出てくる魔物も、闇魔法ではなく雷の魔法で蹴散らしている。

「結構、日が暮れてきたな。今日は行けるといまで行こう」

シスに話し掛けるが、相槌は打ってくれるもの、相変わらずの無口無表情。

それから2時間ほど歩き辺りが真っ暗になつた頃、俺が夜嘗しよつ、と切り出した。

シスは頷くと、何もない空間からテントを取り出した。何の魔法だろうか。激しく知りたい。

食料などは、テントの袋にテントと一緒に入っていた。

街道から少し外れて、テントを設置する。昔、何回かキャンプに出掛けたことがあったので、案外簡単にテントを組み立てられた。

馬車を解体してシスの魔法で持ってきた木材を少し出して、俺の火の魔法で点火する。即席の焚き火の完成である。念のため言っておくが、馬は食肉にはせず、適当に放しておいた。

固いパンと干し肉を食べ、これまたテントの袋に入っていた水筒から水を飲んで、寝た。俺は外で、シスはテントの中で、だ。うす一ぐ夜の闇に100mくらい俺の闇魔法を広げ、それを索敵範囲とした。時折索敵範囲に魔物が入ってくるため、その都度俺が起きて魔物を殺した。7度目に起きた頃、空が白み始めていたため、闇魔法を解き、シスを起こす。寝顔を見て、少し見惚れてしまつたのは秘密だ。

またパンと干し肉と水という簡素な食事を済ませ、テントを置くで出発した。

出発してから3時間頃、街道を歩いていると後方から馬車が走つて来るのが見えた。

丁度いい。30分くらい気付かない振りをして歩いていると、馬車が俺達に追い付いた。

そこそこ大きい馬車である。商人の馬車か。

「乗せてくれないか」

白い硬貨（約2万円）を指で弄りながら御者に声を掛けた。

御者はこくりと見ると（正確には俺の手元）、ゆっくりと馬車を停止させた。

「どこまでだ」

「近くの街まで」

御者に白い硬貨を渡して荷台に乗り込む。

「おい、そここの女まで乗せるとは言つてないぞ」

「護衛がいないうだが。魔物に襲われたらどうするんだ」
御者がシスを指差して言つた。クソが。さすがに商人か。抜け目がない。

商人に応えず、俺は言つた。

「先ほど、雇つた護衛は魔物に襲われて全滅した」

「なら、こいつは乗賃の代わりに護衛。それでいいだう」

俺の答えに商人は満足したようだった。ハナから、このつもりだつたのだろう。

「少し臭いが、我慢してくれ」

商人が言う。何か臭う物を乗せているのだろうか。

馬車の幌をぐぐると、それは明らかになった。

「奴隸、か」

金属製の檻の中に、手錠と足枷をされた人間が5人いた。この臭いは、この人達の体臭と垂れ流しの糞尿だと思い至る。

文化レベルが中世並みのこの世界では合法なのだろうが、やはり奴隸の非合法とされている世界から来た俺としては生理的な嫌悪を隠しきれない。

できるだけ檻から離れて、腰を降ろす。俺の隣にシスが座った。

奴隸達は、ボロ布を纏い、虚ろな表情で座っている。俺と同年の変わらない女の子がいて、感情では助けたいと訴えている。それは不純な下心からくる物で、俺はその感情を強く抑えつけた。

「シス、奴隸つてのは、どうこう経緯があつてなるモンなんだ？」

気になつて訊いてみた。

「……大体は借金のカタ。あとは口減らし、犯罪者などがなる」

成る程、まあ、そんなところか。

しかし、シスは話し掛ければ答えてくれるようになつた。何故だろうか。

……臭い。なんだこの臭いは。奴隸の身体くらい洗つておけよ。

馬車に乗つて、奴隸達の臭いにも慣れたころ商人が、街が見えて来た、と言つた。案外早いな。徒步とは違うのだが、徒步とは。

取り敢えず街に着いてからの目標は、冒険ギルドとやうに加盟し金稼ぎだな。

ちらりと、シスの方を見る。

できれば、この少女とは離れたくない。損得勘定なしに、純粋に、そう思つた。自分らしくない事は自覚している。ここに召喚される前は、自分の周りには打算で付き合つてゐる友人しかいなかつた。全て利己的な考え方の末、生まれた交友関係だつた。

だけど、どういう訳かこの少女とはもっと、純粹で潔白な関係を持ちたいと思つた。

惚れたのかもしれない。やはりガラにもなく、そう思つた。

主人公が効率のみで動くとつまらないので、 惚れさせてみました

盗賊（前書き）

感想やお気に入り登録、ありがとうございます。

いつの間にか1万PVも突破し、やっと軌道に乗ってきたかな、なんて思つたりします。

盗賊

商人は、街が見えた、と言つたが、それはかなり遠目に見えるだけであつて、實際は馬車でも明日にならなきや着かないような距離であった。

俺は隣の、頭一つ分くらい低い銀色の頭頂部を見た。

自分は恐らく、この無口で銀髪の少女 シスに恋をした。

何故、と訊かれても、巧く答えられない。しちまつたモンはしちまつたつてことである。

銀色の髪をじっと見つめていたら、突然シスが立ち上がったかと思つと、馬車の外に出て行つてしまつた。いつの間にか馬車も停まつていた。

なんだ、と思つて馬車の幌から顔を出すと、後方100mくらいに一台馬車が迫つてきていた。

しかし、様子がおかしい。馬車の屋根から一本旗が伸びていて、旗にはおつかない髑髏のロゴがプリント（？）してある。そう、まるで海賊が掲げるような旗であった。

商人がそれを見て呟く。

ハゲドモ盗賊団、と。

モブ確定であった。

「強いのか？」

商人に訊いてみると、すると、商人は少し驚いた顔で
「ハゲドモ盜賊団を知らんのか。……あいつらは冒険者崩れの集まりで、ここらでは最強の盗賊だ。倒せば報奨金が出る。好んで人殺しはしないが、物資は迷わず略奪する。奴らに狙われたら、確実に破産、というのが商人の間での通説だ」

ほー。そんな強いのか。

というか、そんな奴らと戦つて大丈夫なのか、シスは。

馬車から、下卑た笑いを浮かべて7人の屈強そうな男が降りて
来た。そして案の定　全員、スキンヘッドであった。

なんだあいつら。ギャグ要員だとしか思えないんだが。

男達は、シスの姿を認めるとな下卑た笑いを更に深くした。

「アニキィ、こいつあ上玉ですぜえ。こいつを頭に捧げれば、俺達の幹部入りもそう遠くねえ話なんじゃねえですかい」

言っている事が思い切り小物である。本当に強いんだろうか。

男達と対峙して、最初に仕掛けたのはシスであった。

シスはその場から一步も動かずに、腕を軽く振るつた。

それだけの動作で周囲の気温が下がり、シスの周りに無数の氷柱が発生する。

そして

「行け」

シスが短く命令を発すると、氷柱は全て男達に殺到した。

「これで男達は全滅、すると思われたが

『ぬんつ』

氣合いの声を挙げ、スキンヘッド全員が『サイドチェスト』。全て弾かれる氷弾。

……え、何アレ。馬鹿なの？ 死ぬの？

肉体一つで、魔法弾くとかチートだろ。あいつらの肉体はどんな物質で構築されてんだ。

またシスが動いた。次は人差し指の指先から高圧縮された水を放出する魔法である。反動とか気にしたら負けである。

が、それだけ強力な魔法を撃たれても、スキンヘッド達はピンピングしている。

どうやら、今のがシスの出せる最大火力だったようで、魔力を使い果たしたのかその場で棒立ちになってしまった。

そして、ニヤニヤしながらシスに近づくスキンヘッド達。

スキンヘッドの1人が、シスに手を伸ばしかけたその時、

バチイー！

シスに触るうとしていたスキンヘッドの体が、ゆっくりと後ろに倒れる。原因は、強力な雷の魔法。そのスキンヘッドの顔は、かなりの高電圧に当たられたため黒く焦げていた。

倒れた奴以外の6人のスキンヘッドは、魔法の放たれた方向を確認した。

スキンヘッド達が見たのは

「調子乗んなよ、カス共」

歯を剥き出しにして囁く、俺の姿だつただう。

俺は軽く手を振るつた。あんな筋肉共、これだけで十分だ。

やつたことは、シスの技と同じ。俺の周囲に無数の高電圧雷球が浮かび、バチバチと音をたてている。

「レッシリラゴー」

俺は雷球に命令を下す。無数の雷球は、我先にとスキンヘッド共に殺到した。

雷球を撃ち終わり、閃光と轟音が止んだ。スキンヘッドがいた所には、黒いナニカが転がっていた。かつてのスキンヘッドは、ただの炭へとジョブチェンジしたのだ。

「大丈夫か」

そう言葉を掛け、シスに近づく。

シスは俺の方に振り返った。

その顔はいつものような無表情ではなく、若干戸惑いが浮かんでいた。

「……どうして？」

シスは俺に問うた。

「どうして今助けたの？ あそこで私を助けなければ、あなたについての『密告者』の可能性を完全に消す事が出来た。今までの行動から鑑みると、別に私があそこで男達に連れて行かれても、あなたは特に何も思わないでしょ？」

おっと。非常に答えづらい疑問だ。

まあ、シスがスキンヘッドに触れられそうになつた時、結構自分の事のように怒つてた気がするからな。そりや疑問も抱くか。

その問には敢えて答えず、馬車に戻るぞ、と言ひつてシスに背中を向けた。

シスも魔力切れで少しフラフラしながら、後を着いてくる。

俺は賞金首のスキンヘッド共（恐らく生きている）を商人に任せ馬車の幌をくぐった。

盜賊（後書き）

次回は明日投稿すると思します。

夜に遭遇（前書き）

今回はかなり短いです。

夜に遭遇

商人は、髑髏のロゴがプリントされた旗を持って馬車に戻ってきた。

この旗を冒険者ギルドとやらに見せると、盗賊を倒したことになるんだとか。

だつたら盗賊生かしとく意味なかつたじやん、とか思つたけど、あの様子ではその内魔物に食われて終わりだろつ。

シスは、またいつもの無表情に戻つていた。可愛い。頬擦りしたい。

……おつと。

つい内なる欲求が。

商人にはえらく感謝された。報奨金は全額くれるといつ。当たり前だ。

シスと一緒に馬車に揺られていると、夜になつた。一度俺とシスは馬車を降りて夜営の準備を始めた。また簡素な食事をとり、横になる。商人も自分で小型のテントを張つて夜営していた。やはり商人もこちらに負けず劣らず質素な食事だつた。

食事を終えた商人は、こちらに来て、言った。

「見張りは立てないんだな」

寝よつとしている所に来るものだからさよとイーラッシュきて、
ぶつきりまつに返す。

「優秀なモンでね」

「そうか。あのハゲドモ盗賊団を倒したんだ。大丈夫だと思うが、
気は張つておいてくれよ。ここは稀に下級の龍種が出るんだ」

下級とはいえ、龍と言づからには強いんだろう。

安心しろ。夜なら俺は例え魔王にすら負けないからな。いや懶
心とかではなく事実だ。

例の「じとく闇魔法を薄く広げて索敵。今夜も忙しくなりそうだ。
商人は、落ち着き払つた俺の態度から、大丈夫といつのを悟つ
たらしく、自分のテントに戻つて行つた。

そして俺の意識も、暖かい毛布に包まつた瞬間、ゆっくくりと沈
んで行つた。

索敵範囲に何かが引っ掛けた。毛布を名残惜しむ身体を無理
やり起こし、今まで何度も魔物が索敵に掛けたか思い出す。

今夜は5回引っ掛けたため、これで6回目。かなり眠いが、安眠しているシスの為だと思えば頑張れる。

空はまだ暗く、沢山の星がキラキラと輝いている。まだ夜は明けなさそうである。

索敵に掛けたのは1体。そこここ大きい。商人の言っていた龍種とやらか。

見てみたい、と思った。今までは、その場から動かずに少し魔物に意識して串刺しにしていたが、龍種と言つのがどういう格好なのか興味を持った。

立ち上がり、龍のいる方へ歩き出す。

70m程歩き、俺の目に飛び込んで来たのはまさしく、『龍』だった。10m程の細長い蛇のような形状の体躯をつけねらせ、こちらを見据えている。

確かに、商人が念を押す程の威圧感と強者の気配はする。だが、それだけ。夜を支配する俺の敵では無かつた。

興味を失い、腕をけだるげに振るう。眠い。早く殺して寝よう。

龍は無数の闇の杭に貫かれ、断末魔の叫びを擧げることもなく絶命した。

適当に鱗と角を闇魔法で剥ぎ取り、寝床に戻りとして商人の馬車が目に留まる。

今はかなり寒い。

ふと、馬車の中の奴隸の事が気になつた。

だが、そんな考えを頭を振り思考から追い出す。あの中には犯罪者もいるかもしれないのだ。だとしたら、いま馬車の中で凍えているのも当然の報い。俺のふざけた偽善で同情などするべきではない。

自分の寝床に戻り、毛布をかぶる。そして、再び俺の意識は浅く沈んでいくのだった。

夜に遭遇（後書き）

次回は頑張りますので、
次は月曜に更新したいな。
です。

失恋からの（前書き）

やつてしまつた……

丹曜に投稿するとか書くとおもがいり、まさかの連日投稿……

すこませんだけ……

失恋からの

昨夜は魔物が8度襲つて來た。内一回は下級の龍種であつた。

田が覺めると、空は白み始めていて、いそいそと闇魔法を回収する。明るい中ほつとくと、すぐに魔力が無くなるのだ。

近くに落ちてこいる龍の鱗と角を拾い、シスの所へ行く。

テントに入ると、シスはまだ寝ていて、思わず隣に寝てしまいたくなる衝動に駆られるが、ぐつと堪える。

「起きる、シス」

安らかな表情で眠るシスに声を掛け、起こす。

いま気付いたが、長旅で一度も風呂に入っていないにもかかわらずシスは全然臭わなかつた。

なんかそういう魔法でもあるのだろうか。

シスは田を擦りながら起き上ると俺の方へ顔を向け、言つた。

「…………おはよう」

バカ……な……。今まで自分から話しかける口アリなんて、ほとんど無かつたのに、朝の挨拶だとう……！

不意討ちだ。無表情の挨拶に、鼻血を噴きそうになりながらも必死に返す。

「お、おはよー……」

シスの無表情に一瞬疑問めた感情が浮かぶが、すぐに消え失せいつもの無表情に戻る。

テントをできぱきと斤付け、シスと共にまたパンとチーズの貧しい食卓を囲む。ああ、肉が食いたい。

朝食を食べ終わり、馬車の方へ向かう。馬車にはもう商人が乗つていて、準備万端という風情だった。

「遅いぞ。あと5分遅かったら、お前らを置いていく所だった」

商人がそんなコトを言つ。ふざけてんのか、こいつは。

「料金は前払いしてんだ。俺達が多少遅くとも、お前には俺達に会わせる義務がある。そのところ、忘れてもらっちゃ困る」

そう言つて、龍の角を見せる。

「俺の運ぶ『商品』は鮮度が命だ。だから、出来るだけ早く……おい、お前、それは龍の角か？」

商人が驚きの表情を見せる。

「ああ、夜に狙われたからな。返り討ちにしてやった」

俺がドヤ顔で言つと、商人は改まって

「なあ、お前俺の専属護衛にならないか？ 勿論、報酬は破格だ。いい話じゃないか？」

「断らせて貰うよ。この馬車は臭くて堪らん」

勧誘は適当に流して、馬車の出発を促す。

商人は、残念だ、と言しながら前を向いた。俺達は馬車の荷台に乗り込んだ。

漸く、長かった旅も終わり、目的とする街、『ハイアン』へ着いた。その街は、昔読んでいたとある漫画に出てくる街を彷彿とさせる造りだった。その漫画では、巨人と呼ばれる脅威の存在から『壁』の内の街にいることで身を守っていた。

それと同じだ、と思った。ただ、その脅威が巨人から魔物に置き換わっただけである。

俺達が着いた街は、強固そうな壁に囲まれた、どこか閉鎖的な雰囲気漂う街だった。

実は、メノウ王国とかもそつだつたらしいが（というか殆どの街や国が）魔物から住民を護るために壁に囲まれているといつ。メノウ王国のは、ずっと馬車の中にいたから気付かなかつた。

街の入り口は、特に検問やらがある訳でもなく、普通に開いた門から入った。

街の内部は、外からは想像も出来ない程賑わいがあった。

「じゃ、俺達はこいで」

と言つて、馬車から降りる。

商人は頷くと、

「もし奴隸が必要になつたら、『ヘリムーア奴隸商会』を『ご贔屓に』

と言つて、馬車で去つて行つた。

俺はシスに向き直ると、

「これで街に着いた訳だけど、これからはどう行動する？ 別れて行動するか？ それとも……」

シスに問う。

「共に行動するか？」

俺がそう言つても、シスは表情を変えることはせず、やはり淡白に、こう呟けた。

「……別れて行動する」

俺の胸を、息苦しさが襲う。

悲しい、と思った。

この銀髪の少女の為に、色々やつた。一緒に馬車の護衛をしたり、夜の見張りをしたり。裏切られた、ような気分になつた。

でも、この好意は勝手なモノだし、押し付けてはいけないと思う。

そう割り切り、内心は表面に出さずに、シスに応える。

「そうか。この街にいたら、また会つことがあるかもな」

そう言つて、腰に括り付けた袋から白い硬貨を5枚程取り出し、シスに差し出す。

「これまで色々教えて貰つたからな。その報酬だ。」

「……」

シスは無言で硬貨を受け取ると、俺に背を向けて、去つて行った。

……………失恋、つて、こんな気分なんか。

シスの遠くなる背中を見ながら、俺はそんなことを考えた。

頭を振るい、そんな考えを思考から追い出す。

いま考へるべきコトは、そんなことではない。俺には、金が必要だ。いまシスに白い硬貨を5枚も渡してしまったせいで、所持金は物凄い少ない。仕方ない。男とは見栄を張りたがる生き物なのだ。

宿に泊まれやうな金はあるものの、かなり短い期間しか泊まれないと思われる。

そして「飯まで食つたら、恐らく、無一文。

そんなおぞましい想像に身震いする。

そこでふと気付く。

虎の頭、龍の鱗と角が、未だにシスの手元に在る」と。

やってしまった、と頭を抱える。あれが今のところ、唯一の資金源だったのだ。

だが、なんだかわざわざ追いかけるのも馬鹿しくない。おまけに、失恋（だと俺は思つてこむ）までしているのだ。尚更、追い掛け難い。

となれば、働くしかない。

いや、あるじやないか、ファンタジーの王道仕事斡旋所、『冒険者ギルド』が。

俺は、訪れた金の気配に失恋のことを少し忘れて、人知れずほくそ笑むのだった。

俺はいま、冒険者ギルドの建物の前に来ている。

あの後、適当に通行人を捕まえて冒険者ギルドまでの道程を教えてもらい、散々迷った挙げ句、今に至る。

それにしても、冒険者ギルドの建物は、俺の想像していたものと変わらなかつた。

木材のみで造られた建物。

剣が交差しているイメージが写された看板。

建物の中から漂つてくる酒の臭いと喧騒。

全てが、俺のイメージしていたものと同じだった。

俺は、進学して、初めて登校する学生のような感情を胸に抱き

ながら、冒険者ギルドのドアをくぐつた。

失恋からの（後書き）

感想、誤字脱字指摘など、頂けると嬉しいです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5520y/>

今は勇者もダークサイド寄り

2011年12月17日18時55分発行